

平成二十五年度 入学試験問題

国語

第三回

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから七ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙の解答らんに入入してください。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

私たちは、心という言葉を日常生活で使うとき、⁽¹⁾「日常的な心の概念」を把握しています。ですから、この概念は、心という言葉の日常での使われ方を探ることで明らかになるでしょう。その中でも、心があたかも実体を持つかのように扱われているものを考察することは、後に日常的な心の概念と合致する対象が現実の世に存在するかどうかを探る際に、ユウコウであると思われま

そこで、たとえば⁽²⁾「心を込めて、あなたへ贈ります」「そんな恐ろしい考え、心にもありません」、といった使い方を取り上げてみましょう。前者の例では、私の心は、あなたに贈り物をするときにわざわざ込められ、また、後者の例では、あなたに身の潔白を証明するときにわざわざ開示されるようです。ただし、あなたや私は、それを五感で捉えることはできません。

したがって、「日常的な心の概念」とは、「私の内にある何者か」のようです。ただ、この何者かに対して、「私のあずかり知らない全くの他人」という感じは決して生じません。そうではなく、普段はうかがい知れない「もう一人の私」といった感じが生じます。このように、「日常的な心の概念」とは「私の内にあるもう一人の私」です。

この「もう一人の私」を「わたくし」と表記して「私」と区別し、日常的な心の概念を「内なるわたくし」と呼ぶことにします。贈り物をするときにわざわざ込められ、また、身の潔白を証明するときにわざわざ開示されるのは、この「内なるわたくし」なのです。いずれの場合も、普段うかがい知れない「内なるわたくし」の存在をあなたに知らせることで、特別な親愛や誠実を表明する、というわけです。

次に、日常的な心の概念「内なるわたくし」が、現実の世界、すなわち私たちの内に存在することを確かめようと思います。すでに述べたように、「内なるわたくし」は、五感では捉えられません。しかし、生き物としての私たちは、その存在を、⁽³⁾「第六感的感覚」で把握しているのです。このように述べると、心は「魂」といった超越的对象であるかのように思われるかもしれませんが。しかし、この第六感的感覚は、日常でしばしば経験している感覚なのです。

それは、「気配」という感覚です。気配は、特別な能力を持つ人が超越的

30

25

20

15

10

5

対象に感じる感覚ではなく、一般の私たちが、「あるはずの実体が隠れているとき」に、普通に得る感覚です。非科学的なものではありません。たとえば、公園で鬼ごっこをすれば、すべり台や植え込みの陰に、友達の気配を感じることもあるでしょう。★サバンナでライオンの足跡を見つければ、鬼ごっこのときに感じるよりもずっと強く、草むらの陰に彼らの気配を感じるでしょう。

あなたが私を目の前にしたとき、あなたは私に心があると思うでしょう。その理由は、あなたは私の内に隠れている「内なるわたくし」の気配を感じるからなのです。科学の世界では心を脳の特定位[★]部位であると主張する科学者であっても、その部位の機能を失った同僚を目の前にして、⁽⁴⁾彼に心があると感じるのもっともなことです。そのとき科学者は、目の前の同僚の内に隠れている「内なるかれ」の気配を感じているのです。

では、もし私が石の下のダンゴムシを目の前にして、同じような気配を感じるならば、その感覚は「内なるそれ」、すなわち「ダンゴムシの心」がダンゴムシの内に隠れていると思うから生じるのでしょうか。さらには、ダンゴムシが隠れていた石を目の前にして、もし同じ気配を感じる事ができるならば、それも「内なるそれ」、すなわち「石の心」が石の内に隠れていると思うから生じる感覚なのでしょうか。

「はい」というのが、私の答えです。しかし、いきなり「ダンゴムシの心」「石の心」と言われても、多くの人は当惑するでしょう。そこで、以下ではまず、人間における「内なるわたくし」とはどのような実体なのかを明らかにします。その後、ゆっくりと人間以外の対象の心に迫っていきま

ここで、私の心、「内なるわたくし」の実体を明らかにするために、私があるあなたに向かつて包みを差し出し、「心を込めて、あなたへ贈ります」と言う場面を、より具体的に検証してみましよう。「心を込めて、あなたへ贈ります」と私がこわばった顔で言うとき、あなたは私を五感で捉えています。今日の私は、いつもと違ってパリッとしたスーツを着ていること（視覚）、それなのに、よほど急いで来たからなのか、せいぜい言っていて（聴覚）、汗の匂いをプンブン、ハナチ（嗅覚）、せつかくのスーツ姿が台無しなこと、などです。⁽⁵⁾このとき、あなたの五感は、「内なるわたくし」を捉えてはいません。

ところで、あなたの目の前の私には、あなたの五感に捉えられないさまざまなことが生じています。まず、私の意識は、「今夜の夕飯は何だろう」

60

55

50

45

40

35

と考えています。また、私の背中には、意識にはまだ上らない「テイド」に湿疹がふくらみだしています。それらのことを、あなたは決して知ること
はできません。

A、「ここで注目すべきことは、私は、「お腹すいたなあ」と言ったり、
無意識に背中をボリボリと掻きだしたりはせず、こぼった顔つきのまま
「心を含めて、贈ります」と言って包みをあなたに渡している点です。

夕飯についての「シコウを担う部位や、背中の皮膚感覚を担う部位はもち
ろん活動しています。」 B、「それらの部位の活動は、引き続き生じても
よいはずの「お腹すいたなあ」という発言や、無意識に背中を掻きだすと
いった「行動」を、発現させてはけません。それぞれの行動は、「抑制」され
ています。 C、「あなたは、私のこれらの部位の存在を、五感を通し
て（オ）スイクすることができないのです。

D、「私の内には、それに伴われる行動の発現を抑制することで「隠
れて」いる部位が存在しています。「心を含めて」と言う私を目の前にするあ
なたが、私に心の「気配」を感じるとき、その正体は、この「活動はしてい
るものの、伴われる（意識的、および無意識的）行動の発現を抑制する部
位」なのです。これらの部位を「隠れた活動部位」と呼ぶことにします。

そして、実はこの「隠れた活動部位」こそ、「内なるわたくし」という「日
常的な心の概念」の正体なのです。心を含めて贈り物を差し出す私は、「働
きを自ら抑制し、他人の五感では捉えられないようにしている部分まで、
あなたに差し出します」と言っていることになります。

（森山徹『ダンゴムシに心はあるのか』）

★サバンナ…熱帯や亜熱帯の草原。

★部位……部分。

★発現……現れ出ること。

問一

——(1)「日常的な心の概念」とはどのようなものですか。次のア～エ
の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 普段はそれが何であるか分からないが、確かに自分のなかに隠れ
て存在していることが実感できるもの。

イ 普通の時は特に感じることはないが、病気や怪我などの異常事態
が起きたときに強く感じられるもの。

ウ いつもは特に意識されないが、自分が正しいことを証明しなけれ
ばならないときに限って感じられるもの。

エ 自分に特別な親愛や誠実があることを示す、自分のこころの中に
隠れている五感で捉えられるもの。

問二

筆者によると——(2)「心を含めて、あなたへ贈ります」『そんな恐ろ
しい考え、心にもありません』は何を目的とした表現ですか。解答ら
んに合うように本文中から五十字以内で抜き出し、最初と最後の五字
を答えなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

《 五十字以内 》 すること。》

問三

——(3)「第六感的感覚」とはどのような感覚ですか。四十文字以内で説
明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問四

——(4)「彼に心があると感じるのもっともなことですか。」とあります
が、なぜそのようなことがいえるのですか。四十文字以内で説明しなさい。
(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問五

——(5)「このとき、あなたの五感『内なるわたくし』を捉えてはい
ません。」とありますが、なぜ捉えられないのでしょうか。二十文字以内
で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問六

A、Dに入れるのにふさわしいものを次のア～エの中から
一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア このように イ しかし ウ さて エ したがって

問七 — (ア) (オ) のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八 本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私たちが日常的に心という言葉を使う時、心があたかも実体を持つかのように扱われることは、心という実体が存在することの証拠と言える。

イ 私たちには「内なるわたくし」と呼ぶことができる存在があり、普段は感覚によつて捉えることができないが、特別な訓練を積み重ねれば捉えることができるようになる。

ウ 「内なるわたくし」は人間だけに存在するものであり、ダンゴムシや石にまでも心の存在を感じることができるのは人間だけの現象である。

エ 他人が何らかの目に見える行動を起こさない限り、その人物の空腹感や皮膚感覚の異常などを感じとることはできない。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「こんな時間に何してたんですか」

自分がされたくない質問はしないつもりだったが、好奇心を抑えきれなかった。彼はなぜ、公園を、それも地面を必要としたのだろう。

「何か植えようと思ったとか？」

真っ先に浮かんだのは記念樹だった。次に浮かんだのは、花の種。ただ、どちらも三十代半ばの男がこっそり植えるには不釣り合いな気がした。

「まさか、タイムカプセル？」

「いや、その……遺骨をね」

「ここに散骨ですか!？」

散骨という言葉が抵抗なく口をついて出てきたのは、韓流好きの母親が最近やたらと「自分が死んだら散骨して欲しい」と言うようになったから。韓国では比較的よく行われるらしい。

「そうか。埋めなくても、その手があったのか」

(1) 「だめですよ、そんなの!」

思わず大声になる。いったい彼は何を考えているのか。お隣の韓国だつて、所かまわず遺灰を撒いたりしないはずだ。ましてここは日本である。

「やっぱり、まずいかな。ここに帰してやるのが供養になると思っただけだ」

「じゃあ、列車にはねられて亡くなった……とか？」

「いや。ここで行き倒れてのを拾ったんだ。自転車で轢いちやっただのかと思っ、すごく焦ったけど」

ここに至つてようやく気づいた。行き倒れているのを「拾う」ことができ、自転車で「轢いた」かもしれないと思える相手は、人間ではない。

「もしかして、野島さんちのペットの話だったんですか？」

「自分で飼ってたんじゃないけどね。でも、誰かに飼われてたわけでもなさそうだった。首輪してなかったし。それとも、首輪をいやがる猫だったのかな」

(2) 首輪をしていない猫と聞いて、心臓が跳ね上がる。

「それ、最近の話ですか」

「いや。大学を卒業した年だから、ずっと前」

彼の年齢は三十四だか五だか。とにかく三十代半ば。大学を卒業するの

30

25

20

15

10

5

が二十二歳。だとしたら……十二、三年前。

「バイトの帰りだったんだ。傘さして乗ってたから、踏切のところまで車輪がレールにはまりそうになってね、あわてて足をついたら、その足許に猫がいて」

フタバだ。踏切と聞いて確信を持った。わざわざ線路上を選んで行き倒れる猫なんて、フタバ以外に考えられない。しかも、あの夜は雨だった。

「まだ息があったから、動物病院探して運んで。でも俺、翌日から研修で東京行かなきゃならなかったんだよね」

つまり、彼は引越しの前夜までアルバイトをしていたわけだ。おおかた人手不足だからと泣きつかれたのだろう。何しろ、三回続けて休日を棒に振るような人なのだから。

「しよがないから、後輩に事情話して、ちようどバイト代貰ったばかりだったから、それ全部預けて……」

類は友を呼ぶ、という言葉が浮かんだ。お人好しの彼の後輩は、やはりお人好しだったに違いない。

「入社式の翌日か、翌々日くらいだったかな。社員寮に宅急便が届いてさ。渡したバイト代の残りや遺骨。結局、次の日に死んだって。ずっとしまいい込んだまま忘れてて、こないだの引越して出てきてね」

これだよ、と彼は後ろ手に隠していた包みを出した。無造作にハンカチで包んだそれは、驚くほど小さかった。

「後輩が律儀なやつで、一日分の入院費と治療費、火葬にかかった費用とか、きっちり計算して紙に書いて。医者のお見みしたいのまでメモしてくれてたんだ」

泣き笑いに似た表情を浮かべて、彼は手の中の包みに視線を落とした。

「どうして、たまたま拾った猫にそこまで……。野島さんも、後輩の方も」

「いや、自分が轢いたと思ったから、なんか後ろめたくてね。後輩のほうは、元からそういう性分だったんだよ」

「でも、すぐに違うってわかったんでしょ。自分は全然悪くないって」

あの夜は土砂降りだった。傘なんて全く用をなさなかったはずだ。なのに、彼はわざわざ自転車を止めて猫を拾った。当時、あの近辺には動物病院なんてなかったから、相当遠くまで自転車を走らせたに違いない。おまけに、健康保険のきかない動物の治療費は高い。入院までさせたとしたら、いったいいくら掛かったことか。

60

55

50

45

40

35

「だからって、そのまま通り過ぎるわけにもいかないだろ。文無しだった
ら、あきらめたかもしれないけど、たまたまバイト代もあったし。店長か
ら餞別だつて★金一封貰ってたし」

本当にどこまで人が好いんだか、と呆れながらも、心の中で手を合わ
せる。一昨日の飲み会とは違う意味で。それでもまだ、フタバを知ってい
るとは言い出せなかった。代わりに美野里は別の質問を出してみる。

「死因……何だったんですか」

どうしてそんなことを訊くのかと訝しげな顔をしたものの、彼は「腎不
全」と短く答えた。

「腎臓ですか」

「昔は多かったらしい。人間と同じ食べ物じゃ、猫には塩分が多すぎるか
ら」

思い起こせば、フタバは練り製品が好物だった。猫缶よりも竹輪やかま
ぼこを好んだ。大好物だったチーズ入りかまぼこなんて、猫にとつては塩
分の塊のようなものだっただろう。それほど頻繁にはないけれども、フ
タバの喜ぶ姿が見たくて、週に一、二回は与えていたような気がする。

「それでも、結構な高齢だったみたいだね。野良だとしたら、あの年まで
生きていたのはよほど運が良かったんだって言われたらしいよ」

フタバは野良猫じゃないですよ、と心の中でつぶやいたときだった。

「飼い猫ならまだしも、野良で足が悪いんじゃない……」

「足が悪い？」

違う。いつもフタバはごく普通に歩いていた。雨の中、行き倒れた猫は
フタバではなかった。⁽⁴⁾失望と安堵感が同時に胸の奥に広がる。

「足っていうか、股関節が変形してたつて。生まれつきだったのか、事故
か何かにあったのかは知らないけど。ぎりぎり歩けても、走ったり、跳ん
だりするのは無理だったらしい」

美野里は声を上げそうになった。フタバは決して家の中に入ろうとはし
なかった。あれはしつけられたわけではなく、単に段差を越えられなかつ
ただけではないのか？ 猫が昼寝をする場所として最も好むと言われる乗
用車のボンネットよりも、貨物線のレールを選んだのは、不自由な足でも
移動可能な場所だったからではないのか。そして、あのゆったりとした歩
き方も。

「その猫、右の耳に切れ目が入ってませんか？ 縦に一センチくらい」

65

「どうだったかなあ」

眉間を指先で押さえて彼は考え込んだ。もう十二年も前の話である。通
りすがりに拾った猫の耳の形など、覚えていいるはずがなかった。

「背中の模様なら覚えてるんだけどな。サングラスみたいな形の」

ああ、やっぱり。子猫の頃にはヒマワリの芽くらいの大きさだったん
じゃないかと言われていた斑模様。ならば、その猫はフタバだ。

「でも、どうして？」

それには答えず、美野里は問いを問いで返す。

「もしかして、今日が命日なんですか」

「うーん。正確な日付は覚えてないなあ。研修があつたんだから、三月な
のは確かなんだけど。ええと、入社式が四月一日で、前日は休みで、研修
が二泊三日……いや、三泊四日だったっけ？」

指を折って数えなくても、フタバを拾ったのが雨の夜なら、その日は三
月二十七日に間違いない。翌日は朝から快晴で、あつという間に水たまり
が乾いていったし、翌々日以降はフタバを捜して歩き回ったから、覚えて
いる。数日間、一度も傘を使っていない。

「逆算すると、二十七日か二十八日になるな。研修が二泊三日だったん
ら、ちよつど今日だ」

廃線跡の話題が出たのは一昨日の飲み会だった。あの話を聞いて、彼は
ここに遺骨を埋めてやろうと思いついたのだろう。昨日は出勤したから、
今日になってそれを実行したのだ。

もしかしたら、フタバの遺骨が送られてきたときからそう考えていたの
かもしれない。ただ、本社勤務の彼は多忙だった。この町を再び訪れるこ
ともなかったのだろう。出身大学があつたとはいえ、親戚がいるわけでも
ない、縁の薄い土地である。そして、遺骨は社員寮の部屋にしまい込まれ
たまま忘れられた。彼に転勤の辞令が出て、引越し作業が行われるまで。

「その猫、知ってます」

毎日、猫缶を開けてやっていたけれど、自分の家で飼っていたわけでは
なかった。だから、フタバの足が悪いことや腎臓を患っていることに気づ
かなかつた。美野里も、両親も、隣のおばさんも。たぶん、フタバが生き
ている間はずっと気づかないままだったに違いない。他にもまだ知らない
ことがあつたかもしれないと思うと、少し寂しい。でも、それは仕方な
いことだったのだろう。

95

90

85

80

75

70

(5) 何かが消えて初めて見えるものもある……。

「うちの……フタバです、その猫」

両の顔を全開にして驚く様子が何ともおかしい。美野里は小さく笑う。笑ったつもりだったのに、涙が出た。

「あの雨の晩から、ずっと会えなくなつて。もう死んじゃつたんだらうつて、わかつてたけど」

彼の視線が美野里の手に落ちる。朝刊のチラシで包んだ沈丁花の花束。ああ、と小さくつぶやくのが聞こえた。

小さなハンカチ包みが差し出される。受け取ると、それは見た目のとおりに軽い。そういえば小柄な猫だったつけ、と今さらのように思い出す。

「ごめん。首輪してなかったから、野良猫だと思つてた」

半ノラです、と言いかけたけれども、うまく声にならなかつた。きつと、ひどい顔になっているだろう。それが少し恥ずかしくて、うつむく。

ずっと区切りをつけたかつた。何かを変えるきっかけが欲しいと思つていた。だから毎年、ここに来た。フタバと、きちんと別れるために。

「そうか。あの猫、フタバつていう名前だったんだ」
うなずくと、また涙がばたりと落ちた。

ちゃんと拾つてもらえて良かった。通りかかつたのがこの人で本当に良かった。小さな包みを抱きしめ、良かった、良かったと心の中で繰り返す。十三回忌の今年、示し合わせたように彼をこの町に寄越したのは、本当にフタバだったのかもしれない。

「私、子供の頃、ここに住んでたんですよ。まだ貨物列車が走つて……」
背後を回送バスが猛スピードで走り抜けていく。何か言われた気がして、顔を上げる。子供のように手の甲で涙を拭き、美野里はその言葉を問いつた。

(永嶋恵美 『廃工場のティンカー・ベル』)

★散骨……遺骨を埋葬せずに山野や海などにまくことよつて行つた葬儀の方法。

★金一封……賃金として支払われる封筒に入つたお金。

問一

——(1)「だめですよ、そんなの！」とありますが、美野里がそのように言つた理由を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア こんなに遅い時間に猫の骨を勝手に埋めようとすること自体許されないのに、まして埋めずに撒くことは許されるはずはないから。
イ 韓国では比較的よく遺灰を撒くことが行われているらしいが、こ

こは日本であり、まして灰にせずに骨のまま撒くのは非常識だから。

ウ 自分で轢き殺してしまつた猫を埋葬するならば許されることもあろうが、死の原因が分からない猫の骨を勝手に葬ることは許されないから。

エ たとえどのような理由があつても、人の骨を許可なく埋めたり撒いたりすることは、許されるはずがないことだから。

問二

——(2)「首輪をしていない猫と聞いて、心臓が跳ね上がる。」とありますが、なぜそのように感じたのですか。三十五字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問三

——(3)「心の中で手を合わせる。」とありますが、それはどのような気持ちですか。三十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスをを用いること。)

問四

——(4)「失望」とありますが、それはどのような気持ちですか。四十五字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問五

——(5)「何かが消えて初めて見えるものもある……。」とありますが、これはどのようなことを述べたものですか。「消えて」「見える」の内容がわかるよう、具体的に六十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問六

——(6)「背後を回送バスが猛スピードで走り抜けていく。」という表現は小説の中でどのような役割をもっていますか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美野里の気持ちや過去の思い出から、現在へと引き戻すきっかけになっている。

イ ゆったりと流れていた物語の中の時間に、緊張感を与えて読者をひきつけている。

ウ 誰も乗っていないバスを描くことによって、美野里の心のむなしさを表現している。

エ バスが通過した際の騒音によって、かき消された野島の言葉の深刻さを和らげている。

問七

この物語に登場する「猫」という語を使った次の一～五の慣用句の意味を後の「意味」ア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 猫に小判 二 猫の額 三 猫をかぶる

四 猫舌 五 猫もしゃくしも

【意味】

ア 熱い食べ物や苦手な人のこと。

イ 非常にせまい場所。

ウ 価値の分からない人には役に立たないこと。

エ ほんとうの性質をかくして、おとなしく見せかける。

オ だれもかれもがそろって。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美野里は野島が埋葬しようとしている猫について実はよく分かっているが、あくまで知らないふりを貫こうとしていたが、話を聞くうちに隠し通すことができなくなってしまった。

イ 野島が死にそうなる猫を拾ったのは十二、三年前の小雨が降っていた日であり、それは知っている猫がいなくなった日と一致していたので、これを知った時点で美野里はその猫がフタバであることを確信した。

ウ 美野里が最終的に行き倒れの猫がフタバであることを確信したのは、野島が覚えていた猫の耳の切れ目や背中の特徴などが自分の記憶と一致していたからである。

エ 美野里は自分が大切にしていた猫を野島が最後に拾って病院に運んだり、その友人が埋葬してくれたりと心遣いに深く感謝するとともに、こうした運命はその猫が呼んだのではないかと考えた。

